

前 (Pre)、授業直後 (Post1)、授業 50 日後 (Post2) の調査から明らかにした。着衣泳授業に参加した 5 年生 1 クラス 34 名が分析対象者であった。調査票は、属性 8 項目、リスク認識 8 項目、対策実行認識 5 項目で構成された。リスク認識項目と対策実行認識項目の合成得点は、Pre と Post2 に中程度の正の相関がみられ、Post1 では有意な相関はみられなかった。リスク認識項目の平均得点は、Pre より Post1・Post2 が高かった。対策実行認識項目の平均得点は、Pre より Post1 が高かった。項目別では、Post2 が Pre を上回ったのは着衣状態での入水によるリスク認識 1 項目のみであった。自然水におけるリスク経験の有無別では、リスク経験有群は Pre・Post2 間でリスク認識 1 項目のみ有意差がみられ、リスク経験無群はリスク認識 3 項目、対策実行認識 2 項目に有意差がみられた。家庭での会話の有無別では、会話有群は Pre・Post2 間でリスク認識 2 項目、対策実行項目 2 項目に有意差がみられ、会話無群はリスク認識 1 項目のみ有意差がみられた。

[C]2 階 C606
8月30日
10:00

11 教—30—□—43

小学校教員の泳力別にみた水泳授業に対する困難感と内容

○野村 東子 (岐阜大学大学院)
宇野 嘉朗 (岐阜大学大学院)

春日 晃章 (岐阜大学)

本研究は教員のクロールおよび平泳ぎの泳力と、指導に対する困難感および内容との関係を明らかにすることを目的とした。岐阜県内の小学校教員を対象にアンケート調査を行い、162 名 (回収率 77.1%) から回答が得られた。教員の泳力を「ほとんど泳げない群: G1」、「25m 程度泳げる群: G2」、「50m 程度泳げる群: G3」、「100m 以上泳げる群: G4」の 4 群に分類して分析した。分析の結果、クロールの泳力群間における困難感で有意な差が認められ、G2 の困難感が G3、G4 に比べて有意に高かった。G1 に関しては有意な差は認められなかったが、G2 と同様に指導に対する困難感が高かった。平泳ぎに関しては泳力群間に有意な差は認められなかったものの、クロールと同様に泳力が低い教員ほど指導に対する困難感が高い傾向にあった。小学校において教員自身が泳げないことが指導に対する困難感を高める一要因であり、少なくとも 50m 泳げるようになることで困難感を低くすることができると推察される。また、7 割以上の教員がクロールに関しては「息継ぎの指導」、平泳ぎに関しては「キックの指導」が難しいと回答していたことから、これらの指導法を教育現場に示していく必要があると考える。

[C]2 階 C606
8月30日
10:15

11 教—30—□—44

身体障害者に対するスノーボード指導に関する基礎的研究

○新井野 洋一 (愛知大学地域政策学部)
湯川 治敏 (愛知大学地域政策学部)

加納 裕久 (愛知県立大学大学院)
中島 史朗 (愛知大学地域政策学部)

身体障害者は、日常生活において行動範囲が制限され、ストレスを蓄積することが多い。スノースポーツは、斜面を滑るという体験によって、日常の抑圧感から解放され、自尊心や積極性の回復に大きな心理的効果が期待される。陸上や人工的な床の上で実施されるスポーツのほとんどは、走る・飛ぶ・投げるなど重力に抵抗して行われる。これに対して、スノースポーツは重力を利用して実施できることが大きな特徴であろう。これは、力のバランスが困難な身体障害者にとって、他のスポーツではできない身体活動とスピード感を体験できるという利点がある。また、滑走時に転ばないようにすることによって、平衡感覚も養える。ところで、身体障害者とスノースポーツに関しては、下肢切断者対象のチェアスキーや視覚障害者対象のブラインドスキー等スキーに関する報告は多くみられるが、スノーボードに関してはほとんど見られない。以上のことから、本報告では、身体障害者に対するスノーボード指導に際して安全面、スタッフ、スポーツ用具、環境などから留意されるべき事柄について検討した。